

二〇一六年九月二三日

谷あひの穂芒分けて風走る
秋嶺の絵画めきたる鏡池
タグボート秋夕焼を引き帰る

隆松

やよい

やよい

二〇一六年九月二日

ゆくりなく幼馴染とあふ墓参
稲架掛くる嫁姑とは見えぬ仲
水亭の臥竜の松の色変へず
秋思ふと亡父の俳兵馬俑
野辺の茶屋卓に一茎吾亦紅

よし女

うつき

ぼんこ

二〇一六年九月二日

月光にとみかうみして風見鶏
禅苑のいづくに立つも萩の風
里は今畦といふ畦曼珠沙華
竹箒に千草盛りたるそば処

まゆ

やよい

やよい

二〇一六年九月二〇日

秋冷の風に里山黄変す
この穴はハイヒールらし秋の浜
食べごろと尻押して見るラ・フランス
鐘楼へ庫裏へと法の道をしへ
秋深し遺影に話かけもして
秋風に背ナを押されて吟行す
那智黒の小路に仰ぐ初紅葉

ともえ

なつき

さつき

うつき

はく子

なおこ

ぼんこ

二〇一六年九月一九日

秋高し新調の靴心地よし
爽やかや神鈴の音頭に受けて
通夜帰り遠回りして虫時雨
袖合す嶺々にたなびく秋の雲
心鎮めよと虫の音夜もすがら
敬老日見守り隊へ感謝状

やよい

うつき

満天

ひかり

明日香

満天

二〇一六年九月一八日

蛇行する大河の秋を聞きにけり
愛らしき孫の絵手紙敬老日
打水に濡れて艶けし石畳
天高くバトントワラー宙に舞ふ
白壁の塀にたわわや柿大樹

やよい

三刀

さつき

さつき

こすもす

二〇一六年九月一七日

人気な気無縁墓へも菊供ふ
夜干ししてふとうち仰ぐ月涼し
鍬の手をとめて帰燕を見送りぬ
望の月あかりへ仏間開けはなつ
畦道へ触るるばかりの稲穂かな

菜々

満天

三刀

なつき

明日香

毎日句会みのる選・二〇一六年九月二五日